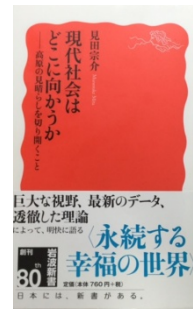


現代社会はどこに向かうか



写真は社会学者の見田宗介氏による岩波新書新刊。副題は「高原の見晴らしを切り開くこと」。表紙カバー裏から一曲がり角に立つ現代社会は、そして人間の精神は、今後どのような方向に向かうだろうか。私たちはこの後の時代の見晴らしを、どのように切り開くことができるだろうか。斬新な理論構築と、新たなデータに基づく徹底した分析のもとに、巨大な問いに改めて正面から応答する。前著から約10年、いま、新しい時代を告げる。

広い視野と斬新な理論構築ゆえに、難解なところも多いが、示唆に富む指摘や分析が続く。ここでは、ここに残った5章のさいごを紹介したい。

環境容量をむりやりにでも拡大しつづけるという強迫観念は、経済成長を無限につづけなければならないというシステムの強迫観念から来るものである。あるいは、人間の物質的な欲望は限りなく増長するものであるという固定観念によるものである。もしそのようなものであるならば、たとえば宇宙の果てまでも探索と征服の版図を拡大しつづけたとしても、たとえ生命と物質の最小の単位までも解体し再編し加工する手を探り続けたとしても、人間は、満足するということがないだろう。奇跡のように恵まれた小さい、そして大きい惑星の環境容量の中で幸福に生きる仕方を見出さないなら、人間は永久に不幸であるほかはないだろう。それは人間自身の欲望の構造について、明晰に知ることがないからである。

けれども一章で見てきたように、日本の青年たちの価値の感覚が、シンプル化、素朴化、ナチュラル化という方向に動いていること、二章で見たように、フランスの急速に増大している「非常に幸福」な青年たちの幸福の内容を充たしているのが、他者との交歓と自然との交感とを基調とする、ピーダハーン（アマゾンの小さな部族＝ピダハン）とさえも通底するような〈幸福の原層〉の率直な解放であるということは、高原期に人間を形成した最初の世代たちが、理論による認識よりも先立ってすでに、その生きられる感覚において、環境容量のこれ以上の拡大を必要とはしない方向で、ロジスティック曲線を飲ばしい曲線とする方向で、無数の〈単純な至福〉たちの一斉に開花する高原として実現するという方向で、生きはじめているように思われる。

上記を書き写して、ふと古典派経済学を集大成した J.S. ミルの「定常状態」を思い起こした。「資本および人口の定常状態なるものが、必ずしも人間的進歩の停止状態を意味するものでないことは、ほとんど改めて言う必要がないであろう。……」

(2018年7月30日)